

令和 7 年 5 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2022～2024

課題番号：22H02445・23K23710

研究課題名（和文）ポスト・コロナの農山漁村の戦略的情報発信のありかたに関する実証的研究

研究課題名（英文）An empirical research on the strategic communication of information in rural areas in the post-COVID era

研究代表者

浅野 耕太（Asano, Kota）

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：50263124

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,300,000円

研究成果の概要（和文）：農山漁村には人々を惹きつける潜在的資源が豊かに存在する。本研究で着目した紅葉狩りは古来より全国各地で享受されてきた伝統的なレクリエーションの一つである。加えて、紅葉狩りが有する公共財的性質（非排除性および非競争性）および農山漁村でこそそれら資源の賦存量が豊かであることを踏まえると、地方創生の一手段としての農山漁村への潜在的人流規模拡大の可能性は大きい（課題1・2への貢献）。本研究は、潜在的人流を引き込むための方策として、名所周辺の広葉樹、水辺環境、宿泊施設等の整備と同時に、観光振興施策の検討にあたり、農山漁村が有している利点を理解した上での情報発信を行う必要性に言及した（課題3への貢献）。

研究成果の学術的意義や社会的意義

農山漁村には紅葉狩り以外にも、魅力ある地域固有資源が数多く存在している。それらの魅力を的確に理解すると同時に、その魅力を最大限活かせるような施策や情報発信を行うことは、地方創生を図る上で不可欠である。本研究がその一助となる離散選択モデルの最適輸送理論を用いた新たな推定法を開発したことは学術的意義を有しており、今後その応用としての人流予測が進められることの社会的意義は大きいと料する。

研究成果の概要（英文）：Rural areas are rich in potential resources that attract people. Autumn leaf viewing, which was the focus of this study, is one of the traditional recreational activities that has been enjoyed throughout Japan since ancient times. In addition, considering the public goods nature of autumn leaf viewing (non-excludability and non-rivalry) and the fact that these resources are abundant in rural areas, there is great potential for expanding the scale of potential traffic to rural areas as a means of regional revitalization (Contribution to Issues 1 and 2). As a measure to attract potential traffic, this study noted the need to develop broadleaf trees, waterside environments, accommodation facilities, etc. around famous places, as well as the need to communication based on an understanding of the advantages of rural areas when considering tourism promotion measures (Contribution to Issue 3).

研究分野：環境経済学

キーワード：インバウンド

## 1. 研究開始当初の背景

地方創生の成否を握る要因のひとつとして、近年の観光産業の目を見張る成長を背景に、農山漁村が有する潜在的な固有資源をモノ消費だけでなく充実したコト消費やトキ消費に繋げ、都市や海外からの観光需要を獲得することに大きな期待がかけられてきた。急速に拡大した新型コロナウイルス感染症によって農山漁村への人流は激減したが、ポストコロナの人流回復を見据えた観光政策立案、農山漁村への人流の呼び込みとそれによってもたらされる経済波及効果の把握は地方創生を実現するための重要な論点であった。そのような状況下で、農山漁村に求められていることは、人々を惹きつけるために不可欠な地域の魅力を磨き上げることと、その魅力を広く、的確に人々に周知する手段を講じることである。

農山漁村の振興策を検討するにあたって、次の2点で研究深化が求められていた。第一に、観光産業において重視される地域の魅力形成要因の同定である。第二に、新聞・テレビやインターネット・SNS等が提供する情報の消費に呼応して変化しうる人流動態の可視化である。

既存研究を基礎に、農山漁村が人流を呼び込む際に重要な要素となる地域の魅力形成とそれら魅力に関する情報発信による潜在的人流規模を科学的に推定可能とすることは、今後の地方創生を推し進めていく上で重要な基盤的知見を提供することになると思料される。

## 2. 研究の目的

研究開始当初の背景を踏まえ、本研究は次の2点について定性的・定量的に解明することを目的とする。第一に、農山漁村固有の潜在資源を活かした人流の呼び込みに着目し、農山漁村にある自然資本や生態系サービスの属性情報、情報媒体別の情報発信状況、ならびに人流データを統合し、農山漁村における人流回復に向けた魅力向上方策を検討する。第二に、メディア・情報コンテンツ別に人々が抱く印象・感情を動かさしめる情報発信や公共政策のあり方を探求することで、地方創生の一手段としての農山漁村への潜在的人流規模拡大に必要な具体的な政策提言を行う。

## 3. 研究の方法

農山漁村の魅力を測る対象として、データの利用可能性も鑑みた上、我が国において古来より伝統的に受け継がれてきた観光コンテンツの一つである紅葉狩りに着目した。その上で、研究目的達成に向けて、以下の個別課題を設定し、それぞれに適した研究アプローチを採用した。

### 【課題1】 農山漁村の魅力と情報発信の実態把握

農山漁村の魅力に関連するデータ構築の下、地域の魅力構成要素と情報発信内容の関連分析の結果を取りまとめる。

### 【課題2】 情報発信による人流動態変化の可視化

スマートフォンの位置情報を利用した大規模人流データを用いる。データ構築の下で、人流動態の可視化及び人流動態データを経済分析するための新たな手法を開発し、紅葉を事例に応用した結果を取りまとめる。

### 【課題3】 感情を動かす情報発信・公共政策の探求

課題1・2の研究成果を踏まえた上、地域の魅力を伝え人々を惹きつける情報発信に求められる心理的な感情要因や感情を動かさしめる情報発信を行う上で最適な情報コンテンツおよび発信メディアの組み合わせに関する検討を行う。

## 4. 研究成果

### 【成果1：課題1】

国内で最も利用されている観光情報プラットフォームの一つである『ウォーカープラス』を用いて、全国に点在する代表的な紅葉の名所835箇所を特定し、それら地点に関わる属性情報をweb scrapingにて抽出した。具体的な属性情報は、緯度経度、見頃、自然公園の指定、寺社仏閣の庭園、入場料、近隣スポット情報、樹種である。図1は特定日の紅葉狩りの見頃分布である。さらに、緯度経度情報に環境省『自然環境保全基礎調査』ならびに国土交通省『国土数値情報』のデータを統合し、名所を含む周辺地域全体の魅力構成要素をデータ化した。本研究では、名所を中心とした一定範囲内(半径1, 3, 5, 10km以内)の広葉樹面積、水辺環境等の量的データおよび文化・宿泊施設の密度等である。加えて、アメダスの観測情報を用いて、気温・降水量・日照時間等の人々の余暇活動に影響を与えうる気象データを収集した。

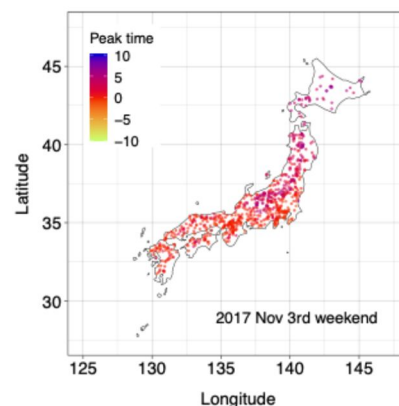


図1. 見頃分布

【成果 2：課題 2】

全国には紅葉狩りを楽しめる場所が数多く存在するが、それらを網羅的にカバーした消費統計データは存在していない。そのため、まずは紅葉狩りに関する人流動態データを作成する必要がある。その際、紅葉狩りの時期は短く、かつ全国各地で行われるレクリエーションであるため、既存の統計データを組み合わせたととしても、人々の行動様式を適切に捕捉することは容易ではない。本研究では、紅葉狩りに関する全国規模の人流の可視化に向けて、スマートフォンの位置情報を活用したモバイル空間統計( Docomo: 有償提供 ) を用いた。北日本で紅葉が始まる 10 月第 2 週目から南日本で紅葉が終わり始める 12 月第 2 週目までの各週末を対象に、紅葉狩りの人流動態を可視化したものが図 2 である。図 1 の結果と対比させると、見頃を迎えた名所に人々は集中しており、スマートフォンの位置情報から紅葉狩りの人流を高精度に再現できていることが分かった。

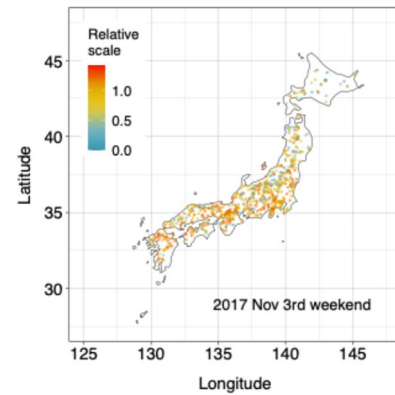


図 2. 人流動態分布

次に、紅葉名所周辺の社会・経済・環境属性データおよび紅葉狩りに関する人流動態データを統合し、農山漁村が人流を呼び込む際に重要となる魅力形成要因をレクリエーション研究の枠組みを用いて実証的に特定する。なお、本研究では、データ制約上( 個人情報保護に伴うデータへのアクセス制限 ) スマートフォン利用者の居住地情報については都道府県単位に集約されているため、分析で用いるデータは都道府県を代表する平均的消費者と見なした。

レクリエーション研究において、余暇活動を構成する諸要素に人々が見出す社会経済的価値を導出する際にはランダム効用モデル( Random Utility Models: RUM ) が用いられることが一般的である( McFadden, 1974 )。RUM では、余暇活動に関する人々の効用を、分析者が体系的に捉えることのできる効用部分とそうでない部分から構成されたと考え、後者を攪乱項として表現することを特徴としている。RUM の肝要は、攪乱項に特定の分布仮定( 主に logistic 分布や正規分布 ) を置くことで、推定の簡便化を図る点にある。しかし、効用の攪乱項の分布を分析者が事前に知ることは容易ではない。それゆえ、次善策の一つとしては状況に応じたメタ・モデルを用いた感度分析を行い、仮定の妥当性が定性的に検証されたりする。

以上の背景を踏まえ、本研究は、従前の研究の流れとは一線を画し、数学分野で発展目覚ましい最適輸送理論( Optimal Transport Methods: OTM ) ならびに環境評価手法の一つである離散選択モデル( Discrete Choice Models: DCM ) を統合することで、攪乱項に関する分布仮定を必要としない画期的な推定手法( OTM-based DCM ) を開発した。図 3 は、モンテカルロ実験を通じて、我々が開発した OTM-based DCM と RUM に基づく従来型の集計的ロジットモデル( Aggregate Logit Models: ALM ) それぞれで得られたパラメータ推定値の分布の一例である。真のパラメータ値は-0.5 になるよう設定している( 図中の黒点線 )。効用の攪乱項について、図 3 ( 左 ) は従来モデルで一般的に仮定される logistic 分布に従う場合、図 3 ( 右 ) はそれとは異なり、相補 log-log 分布に従う場合の結果である。モンテカルロ実験を通じて得られた知見は、小標本かつ選択肢集合が大きいケースにおいては、効用の攪乱項に関する分布に関わらず、OTM-based DCM は ALM に比べて真の値の近傍に集中し、かつ真の値から対称的に乖離するパラメータ推定値を提供するという点であり、沖縄を除く 46 都道府県(  $N = 46$  ) 全国の 835 箇所の紅葉名所(  $J = 835$  ) といった本研究で取り扱うデータの特性を鑑みた場合、我々が開発した OTM-based DCM を分析手法として採用することが妥当であると判断できる。

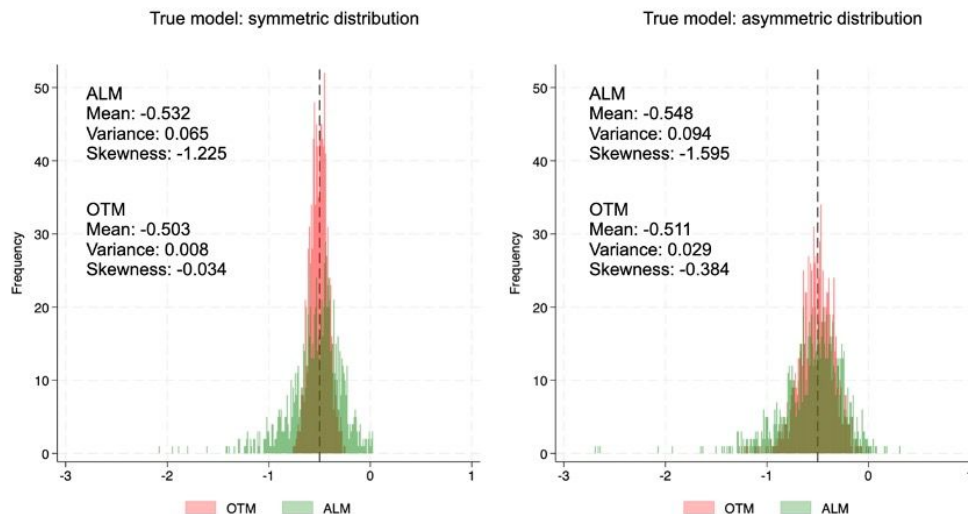


図 3. モンテカルロ実験による分析手法のパフォーマンス比較

注) 小標本かつ大規模選択肢集合のケース：意思決定者数(  $N = 30$  )、選択肢数(  $J = 100$  )

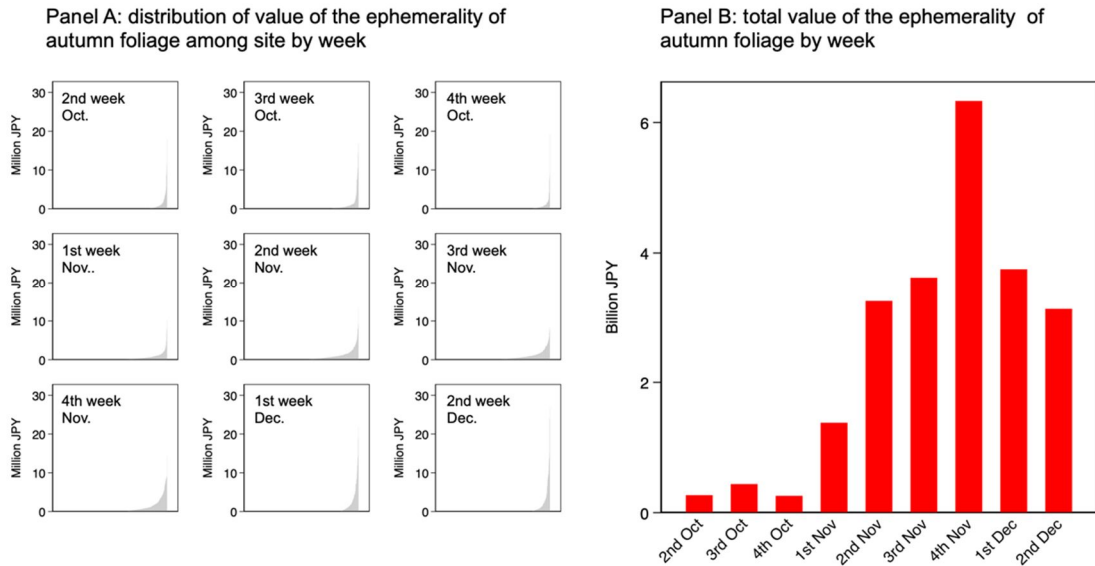


図4. 紅葉狩りの社会的経済価値評価

註) Panel A は紅葉狩りシーズンにおける名所ごとの社会的経済価値を昇順で表している。Panel B は Panel A で示される名所ごとの価値を週単位で集計した結果である。

図4は、収集したデータセットおよび開発した研究手法を用いて、紅葉名所およびその周辺地域の魅力要素に人々が抱く評価を社会的経済価値として導出した結果の一部である。最も重要な知見としては、紅葉狩りのピークは11月第4週目にあり、紅葉狩りの開始時期から終了時期の総計で224億円の価値を有することが分かった点である。本研究では『ウォーカープラス』に掲載されている835箇所の紅葉の名所のみを分析対象としたが、全国には紅葉狩りを楽しめる場所は無数存在する。とりわけ、豊かな自然が比較的多く残されている農山漁村は都市部に比べてより多くの紅葉狩りの機会を人々に提供しうるものと考えられるため、その強みを積極的に活かした観光施策を検討する必要がある。

### 【成果3：課題3】

本研究の最終目標は、地域の魅力を伝え、人々を惹きつける情報発信のあり方を検討すると同時に、地方創生の一手段としての農山漁村への潜在的人流規模拡大に必要な具体的な政策提言を行うことにある。そのためには、課題2の定量的研究成果が示すように、人々が紅葉狩りに出かける最大の動機は訪問箇所が紅葉の見頃かどうかと密接に関連することは確かであるものの、地域の魅力をさらにうまく人々に伝える上で、その他要因の影響についても適切に捉えることが重要である。表1は、紅葉の見頃以外の社会・経済・環境要因が人々を如何に惹きつけるかを示した結果である。支出関数を推定したものであるため、負のパラメータが人々を惹きつける要因、正のパラメータが人々の訪問を阻害する要因として解釈する必要がある。以下、観光情報コンテンツとして積極的かつ効果的に情報発信すべき項目に着目して、結果の解釈・考察を行う。

1. 気温・降水量・日照時間のうち、唯一、降水量のみが有意な結果を示しており、人々の訪問意向を妨げる。また降水量の多寡も重要で、大雨・豪雨時には人々は紅葉狩りに出かけることを控える傾向が強い。
2. 名所の訪問客の混雑具合については、一定程度までの混雑はむしろ人々に歓迎される傾向にある。釣りやハイキング等に関する先行研究では、混雑具合は人々を惹きつける上で負の影響があるとしばしば指摘されるが、紅葉狩りはその限りではないことが明らかとなった。これは、紅葉狩りは広範囲に享受できる楽しみの一つであり、公共財的側面を有していることと関連している可能性が高いと思考する。
3. 名所から半径1km以内の広葉樹林面積の多寡は人々を惹きつける要因として重要である。ただし、樹種によっては紅葉の色彩が異なるが、その影響は本分析では捉えていない点に留意が必要である。
4. 名所付近の湖や河川といった水辺環境は人々を惹きつける。人々は紅葉狩りだけでなく、周囲を形成する環境を一体的に評価している可能性が高いため、地域の観光振興施策を検討する際には上記知見を踏まえた土地利用管理が求められる。
5. 入場料が必要となる寺社仏閣や都市公園よりも無料で楽しめる自然風景の一部としての名所が好まれる。農山漁村にはそういった自然風景の一部として紅葉狩りを享受できる場所が多く存在しているが、農山漁村における観光振興施策において、人々はそういった場所での紅葉狩りを好むことを理解しておくことは重要である。

表 1. 支出関数推定結果（紅葉の見頃以外の社会・経済・環境属性の抜粋）

	specification 1	specification 2	specification 3	specification 4	specification 5	specification 6
Light rainfall	0.0007*** (0.0001)	0.0007*** (0.0001)	0.0007*** (0.0001)	0.0006*** (0.0001)	0.0006*** (0.0001)	0.0007*** (0.0001)
Heavy rainfall	0.0017*** (0.0002)	0.0017*** (0.0002)	0.0016*** (0.0002)	0.0016*** (0.0002)	0.0017*** (0.0002)	0.0017*** (0.0002)
Congestion	0.0002 (0.0001)	0.0002 (0.0001)	0.0002 <sup>†</sup> (0.0001)	0.0003* (0.0001)	0.0002 <sup>†</sup> (0.0001)	0.0003* (0.0001)
Congestion2	-0.0000 <sup>†</sup> (0.0000)	-0.0000 <sup>†</sup> (0.0000)	-0.0000* (0.0000)	-0.0000* (0.0000)	-0.0000* (0.0000)	-0.0000* (0.0000)
Deciduous forest	-0.0006*** (0.0002)	-0.0006** (0.0002)	-0.0006** (0.0002)	-0.0006** (0.0002)	-0.0007** (0.0002)	-0.0007** (0.0002)
Waterfront length	-0.0001** (0.0000)	-0.0002** (0.0001)	-0.0001* (0.0000)	-0.0001* (0.0000)	-0.0001* (0.0000)	-0.0001* (0.0000)
Terrain ruggedness index	0.0003*** (0.0001)	0.0003*** (0.0001)	0.0003*** (0.0001)	0.0004*** (0.0001)	0.0004*** (0.0001)	0.0004*** (0.0001)
Shrine/temple dummy	0.0012*** (0.0003)	0.0012*** (0.0003)	0.0012*** (0.0003)	0.0012*** (0.0003)	0.0013*** (0.0003)	0.0012*** (0.0003)
Park dummy	0.0002 (0.0003)	0.0003 (0.0003)	0.0003 (0.0003)	0.0002 (0.0004)	0.0002 (0.0004)	0.0002 (0.0004)
Site density	-0.0007* (0.0003)	-0.0007* (0.0003)	-0.0007* (0.0003)	-0.0006* (0.0003)	-0.0006 <sup>†</sup> (0.0003)	-0.0006* (0.0003)
Cultural sites	0.0000 (0.0001)	0.0000 (0.0002)	0.0000 (0.0001)	0.0001 (0.0001)	0.0001 (0.0001)	0.0000 (0.0001)
Accommodation capacity	-0.0001* (0.0001)	-0.0003 <sup>†</sup> (0.0001)	-0.0002* (0.0001)	-0.0002* (0.0001)	-0.0002* (0.0001)	-0.0001* (0.0001)

6. 周辺に紅葉の名所が密集している地域には人々が訪れる可能性が高い。周辺に複数箇所の名所が存在する場合、一地点に焦点を当てるのではなく（例えば、全国的に知名度が高い一箇所のみではなく）周辺一帯の名所情報を発信することが効果的であろう。
7. 名所周辺に宿泊施設が十分に整備されている場合に訪問客数は増大する。人流動態データおよび分析結果から、人々は最大で 800km まで遠方の紅葉名所に訪れることに価値を見出していることが分かっている。上記知見および先行研究の知見を併せると、紅葉狩りに訪れる人々は宿泊を視野に入れていることが十分に推察できる。それゆえ、名所周辺に宿泊施設を設置すると同時に、宿泊施設情報も積極的に発信することが効果的である。

#### 【成果の総括】

農山漁村には人々を惹きつける潜在的資源が豊かに存在している。本研究で着目した紅葉狩りは全国各地で享受されてきた伝統的なレクリエーションの一つである。加えて、紅葉狩りが有する公共財的性質（非排除性および非競合性）および農山漁村でこそそれら資源の賦存量が豊かであることを踏まえると、地方創生の一手段としての農山漁村への潜在的人流規模拡大の可能性は大いに秘められている（成果 1・2）。本研究は、潜在的人流を引き込むための方策として、名所周辺の広葉樹、水辺環境、宿泊施設等の整備と同時に、観光振興施策の検討にあたり、農山漁村が有している利点を理解した上での情報発信を行う必要性に言及した（成果 3）。

農山漁村には紅葉狩り以外にも、地域自身が十分に把握しきれていない魅力ある地域固有資源が数多く存在しているはずである。それら魅力を的確に理解すると同時に、その魅力を最大限活かせるような施策や情報発信を行うことは、地方創生を図る上で不可欠である。本研究は、その一助となる成果を挙げることに貢献したものと料する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Hori Juri、HIRAYAMA Naoko、SATO Yuichi	4. 巻 37
2. 論文標題 The more frequent and richer experience in nature in childhood can make one's later environmentally conscious behavior more acceptable and inclusive	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 JOURNAL OF WATER AND ENVIRONMENTAL ISSUES	6. 最初と最後の頁 1~8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.6012/jwei.37.1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平山 奈央子、法理 樹里、佐藤 祐一	4. 巻 53
2. 論文標題 地域への愛着が持続可能な琵琶湖流域社会を目指す市民活動に及ぼす影響	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 環境情報科学	6. 最初と最後の頁 87~93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11492/eis.53.3_87	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shoji Jun、Hori Juri、Kitagawa Takashi、Sugimoto Ryo、Makino Mitsutaku	4. 巻 19
2. 論文標題 Regional comparison of the structure of human well-being related to ecosystem services in coastal areas of Japan: possible effect of anxiety unique to the ria coast	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Sustainability Science	6. 最初と最後の頁 1751~1762
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s11625-024-01508-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Watanabe Masahide、Fujimi Toshio	4. 巻 68
2. 論文標題 Ambiguity attitudes toward natural and artificial sources in gain and loss domains	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Journal of Risk and Uncertainty	6. 最初と最後の頁 51~75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s11166-023-09420-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 駒ヶ嶺光・法理樹里・松下京平・深町加津枝	4. 巻 第49巻第1号
2. 論文標題 小学生時の自然体験とその後の環境意識の関係	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本緑化学会	6. 最初と最後の頁 21-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 時任美乃理・赤石大輔・法理樹里・徳地直子	4. 巻 83巻
2. 論文標題 創発型ワークショップ手法を用いたオンライン環境教育の取り組み - 将来世代と考える2030年の生態系	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 環境教育	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Juri Hori, Satoru Inoue, Naoko Tokuchi	4. 巻 35(2)
2. 論文標題 What types of community consciousness factors encourage people to participate in small-scale nature conservation programs in Japan?	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Japanese Association for Coastal Zone Studies	6. 最初と最後の頁 57-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sugimoto Aoi, Roman Raphael, Hori Juri, Tamura Norie, Watari Shingo, Makino Mitsutaku	4. 巻 138
2. 論文標題 How has the 'customary nature' of Japanese fisheries reacted to Covid-19? An interdisciplinary study examining the impacts of the pandemic in 2020	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Marine Policy	6. 最初と最後の頁 105005-105005
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.marpol.2022.105005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 F. Yamane, K. Matsushita and J. Hori
2. 発表標題 Text mining analysis on Japanese dietary life in 1920s: focusing on gathering and preserving natural plant foods
3. 学会等名 2024 亞洲食学論壇 (Asian Food Study Conference) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 山根史博・松下京平・法理樹里
2. 発表標題 昭和初期の農山漁村における節米の意識と実践
3. 学会等名 日本食生活学会第69回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 山根史博・松下京平・法理樹里
2. 発表標題 昭和初期における自家製発酵食・保存食の実践
3. 学会等名 和食文化学会第7回研究大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Matsushita, K.
2. 発表標題 Understanding Inclusive Value Systems in Japan toward Future Regional Revitalization
3. 学会等名 Japan-Korea Rural Planning Seminar (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Ahn A., Hori, J., Matsushita, K., Ohara, A., Wang, W., Hanada, M., Haraguchi, T., Hiramatsu, K., Sakuma, M., Shimono, K., Fukamachi, K.
2. 発表標題 The relationship between the environmental characteristic of urban parks and users' environmental awareness and pro-environmental behavior
3. 学会等名 International Consortium of Landscape and Ecological Engineering (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Hori, J., Yamane, F., Matsushita, K., Mori, K., Kyoi, S.
2. 発表標題 Exploring the relationship between the awareness of sharing marine resources and environmentally conscious behaviors in coastal areas: A case study of a workshop with residents in Minamisanriku Town, Miyagi Prefecture, Japan
3. 学会等名 The 14th Asian Food Study Conference (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Mitsutaku Makino, Olivier Thebaud, Dan Lew, Juri Hori, Fabio Boschetti, Matthew Andreotta, Sophie Leonardi, Nathalir Krien, Jom Schmid, Alan Haynie
2. 発表標題 What is the Ocean We Want? Global survey to understand perspectives on Ocean Decade Outcomes
3. 学会等名 2024 Ocean Decade Conference (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 法理樹里・平山奈央子・佐藤祐一
2. 発表標題 幼少期の自然体験とコミュニティ意識が地域の環境配慮行動の頻度におよぼす影響
3. 学会等名 第32回 地球環境シンポジウム (土木学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Hori, J.
2. 発表標題 Co-designing the future of communities with out-migrants: Insights from a perspective survey in Japan
3. 学会等名 Korea-Japan Rural Planning Seminar 2024 (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 法理樹里・丸山優樹・玉木志穂・東良太・國井大輔・林 岳
2. 発表標題 他出子が抱く出身地域に対するコミュニティ意識の分析－鳥取県日野町を事例に－
3. 学会等名 2024年度農村計画学会全国大会（秋期大会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 法理樹里, Matthew Andreotta, Daniel K. Lew, Fabio Boschetti, Nathalie Krien, Sophie Leonardi, Olivier Thebaud, 牧野光琢
2. 発表標題 What is the ocean we want? ー海に対する意識調査の国際比較分析ー
3. 学会等名 日本海洋政策学会 第16回年次大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 田畑玲雄・辻秀斗・法理樹里・小路淳
2. 発表標題 リアス海岸がもたらす福利・懸念の総合評価：西南日本2地域（愛媛県南部，宮崎県北部）における主観的側面の比較
3. 学会等名 令和7年度日本水産学会春季大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 松下京平
2. 発表標題 グリーンインフラの社会経済的価値研究について
3. 学会等名 GIJ (グリーンインフラ・ネットワーク・ジャパン)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 駒ヶ嶺光・法理樹里・松下京平・深町加津枝
2. 発表標題 小学生時の自然体験とその後の環境意識の関係
3. 学会等名 日本緑化工学会大会・研究発表会第54回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山根史博・松下京平・法理樹里
2. 発表標題 計量テキスト分析による食生活研究の可能性と課題
3. 学会等名 日本食生活学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山根史博・松下京平・法理樹里
2. 発表標題 昭和初期における食生活の農山漁村比較：計量テキスト分析による可視化を通じて
3. 学会等名 南三陸いのちめぐるまち学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山根史博・松下京平・法理樹里
2. 発表標題 昭和初期における晴れ食・行事食の農山漁村比較：計量テキスト分析を通じて
3. 学会等名 和食文化学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Hirayama Naoko, Yuich Sato, Juri Hori
2. 発表標題 Evaluation of Citizens' Activities and Collaboration for Sustainable Society in Lake Biwa Basin - A Case Study of Mother Lake Goals
3. 学会等名 19th WORLD LAKE CONFERENCE (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 法理樹里・西村俊昭・山口美知子・佐藤祐一・水野敏明
2. 発表標題 地域の小さな自然再生活動の継続に影響を与える参加者の主観的評価とは？ 滋賀県東近江市版SIB「愛知川の小さな自然再生事業」を事例として
3. 学会等名 日本沿岸域学会2022年度研究討論会（口頭発表）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 京都大学大学院人間・環境学研究科編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 321
3. 書名 学問で平和はつくれるか？	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松下 京平  (Matsushita Kyohei)  (20552962)	滋賀大学・経済学系・教授    (14201)	
研究分担者	藤見 俊夫  (Fijimi Toshio)  (40423024)	京都大学・防災研究所・准教授    (14301)	
研究分担者	山根 史博  (Yamane Fumihiro)  (40570635)	広島市立大学・国際学部・教授    (25403)	
研究分担者	法理 樹里  (Houri Juri)  (90744756)	農林水産省農林水産政策研究所・その他部局等・研究員    (82625)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関